

も着継ぎてゆかむ

・今年こそ止めようと思ふ梅漬を水無月の亡母が手伝ひに来る

・終日を遺影の視野に暮しゐる小説を読んだり昼寝をしたり

・夫の椅子に月の光を坐らせむ 洗米、里いも、すすきを飾り

一首目は写生でありながら幻想的な歌。紫陽花は異界から届けられたともしびのようである。二首目と三首目は作者が亡母に抱く葛藤とその受容が主題だろう。四首目と五首目はご夫君への挽歌で、いずれも簡潔な修辞の中に淡い慕情とある種の潔さを感じさせて胸に残る。

『虹の表紙』

19・8・23 青磁社 塔21世紀叢書
森尻理恵 第三歌集(塔)

・パソコンの画面周りにひらひらと三色の付箋が増えてゆきたり

・恵まれた職場ですねと人の言う必死で守りし二十五年を

・手荷物を持ち換える間に吊り革は他人の指に掴まれている

花山多佳子の帯文によれば著者は地球物理学の研究職にある。掲出の一首目、

パソコンの画面の周囲が増えてゆく付箋が輻輳する職務を象徴する。二首目は無頓着な他者の言葉と作者の向き合う現実との落差が口語の効果的使用により浮き彫りとなる。三首目は大都会のひりひりするような日常だが、おそらく競争の激しい職場の状況をも暗喩している。

・泡のような挫折をぶつぶつ繰り返し十

四歳になりたる息子

・持つて生まれた才能が足りぬと泣く吾子を宥めすかしてついには叱る

・たくさんの患者と別れきし医師と思えばドライなもの言い理解す

・考えても詮無きことは考えない時間がなければなおさらのこと

一首目と二首目は母の手一人で育て上げた息子さんのこと。子の挫折に寄り添い宥め、時には叱声を発してしまう母の心の揺れが的確に歌い止められている。

三首目、著者は闘病中の身だが患者として描く主治医像には批評性は失われな

ままに感情は抑制され理的だ。四首目は厳しい現実に向き合う作者の現在が胸

に迫る。口語の取り入れに上手い歌が多く、河野裕子の影響も感じさせる。

『風信子』

19・9・14 砂子屋書房
石原洋子 第二歌集(合歌)

・ふわふわをふはふはと書く旧かなを使

ってみたき合歌の花色

・たった二日旅から戻るに家内はどこかよそよそし主婦われにさえ

一首目は書字に着目した歌。歌人なら誰しも、仮名遣いを替えたくなる言葉に出会った経験があるはず。二首目、旅という非日常から日常に戻る時の違和感が上手く掬い取られている。

・寝付かれぬ女と廊下で会ったゆえスリ

ッパで打たれた虫の身の上

・姉妹三人外反母趾を見せ合えり法事の果てし冷たき廊下

一首目は自身を戯画化した歌。二首目は聖なる空間で姉妹と交わす俗なる話題。どちらも微苦笑を誘う諧謔味がある。作者は日常の小さな気付きを上手く一首に纏め上げる。短歌の本領である。